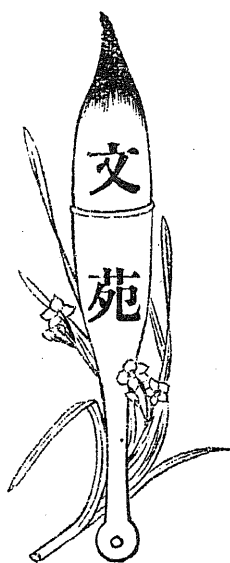


性の獨立を圖る方針をとるにもせよ、以上の所論によりて、毫も殊更に其特性を殺ぎ、之を曲げて、男性に似たる女性を養成する必要なきと明白にして、女性の教育の眼目は確かに、其特性を發展するに在るべきを信ずるものなり。



寫眞

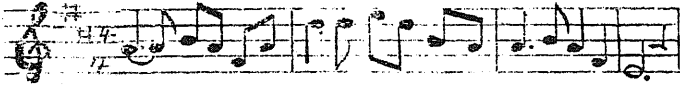
和歌子

世の開くるにしたがひ、さまざまのたふとさきの、たよりよきものゝいでくるは、いどうれしきことになん。寫眞もこのひとつなり。このものよ。

其名の如く、人にまれ、景色にまれ、何にまれ、眞を寫すものにしあれば、こを見るは、其實物を見るに同じ。居ながらにして、外國の景色をながめ、千里の外友とも語るを得るは、げに此寫眞の徳とこそおぼゆれ。寫眞として、うれしからぬはなけれども、わきて、遠くへだゝれる友の許よりおこせたる、はらからなどの、伯母上が行きてのかへるさうつしつ、なごたのしきこといもかきそへておこせたる、いづれも物語るこゝちのせられてうれし。但しなき人の、打ち見ることに、涙の種なり。されども、これあればこそ、今もなほわりし係は忍ばるれ。と。思ふに、またうれしきものといひつべくや。おのれ、去年の春なりき。寫眞して故郷なる家に送りぬ。そのをりの返事に「よくもこえにけるかな。すこやかなるおもゝち物

# 近江八景

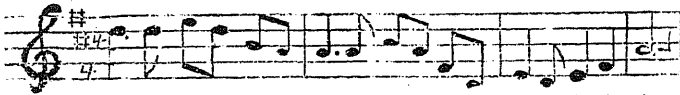
多梅稚作曲



マーツーガーカーラサーキ シグルレバ  
ニセーたのーゆふばえーみぬのかれ



ユーキーニーナリユークーヒラーノヤマ  
いしやーまーでーらーのーゆふーづきは



アハツーハーイツーカークハレソメテ  
かたたーにーおーつーるーかりがれの



ヤバセーニーカーヘルマホーカタホ  
かげさーへーみーよとてらーすなり

影	堅	石	瀬	矢	粟	雪	松
さ	田	山	田	走	津	に	が
へ	に	寺	の	に	は	成	唐
見	に	の	夕	に	い	行	崎
よ	落	夕	映	つ	つ	く	し
と	つ	月	三	か	か	比	ぐ
照	る	は	井	晴	晴	良	る
す	雁		の	初	初	の	れ
なり	金の		鐘	め	め	山	ば
	の						

八景

新保磐次

(轉載を禁ず)

もいひいでぬべきこゝちす。」とて母上の、よろこばせたまひしことありき。さればわれらのごとく、父母の許をはなれて、遠きに在る身には、寫眞こそ孝のたすけをばすれ。と思ふに、いよく、そのたふとさのまさりてなん。さてまた去年のくれ、姉上安らかに女子をあげたまひぬ。おのれにははじめての姪なれば、どびたつばかりのうれしさ何にかたとへん。春子となづけつ、なごさくにつけ、

あはれつばさあらんには、一かけり春子のかほを、なごねがふもせんかたなし。さるをある日の朝なりき。一聲高く郵便と投げいれたるものあり。たれのふみぞと見るに、あなうれし。春子の寫眞なりけり。そのをりのうれしさ、拙筆のつくすべくもあらざりき。これこそ我姪よ。と思ふに、はなちもやらず。其後もこの寫眞は、常に机

上にありて、われをなぐさめぬ。ふみよみて儂みつるをりも、これを見れば、こゝちははやぐぞあやしき。あはれこのうれしさも、世に寫眞といふものあればこそとたふとし。けふしも、青森なる友の許より、寫眞しつればちがくに送らん。といひおこせたるに、待遠におぼゆるあまひ、かくはこのものゝうれしさをものしつ。

春の野邊

さくら

雪か<sup>ゆき</sup>とまかふ盛のさくら

一ひら二ひら散り來る野邊に

萌え出る若草また柔かく

色わざやかに花咲きみてり

櫻の木かけに若草しきて

はらから二人花つみ遊ふ